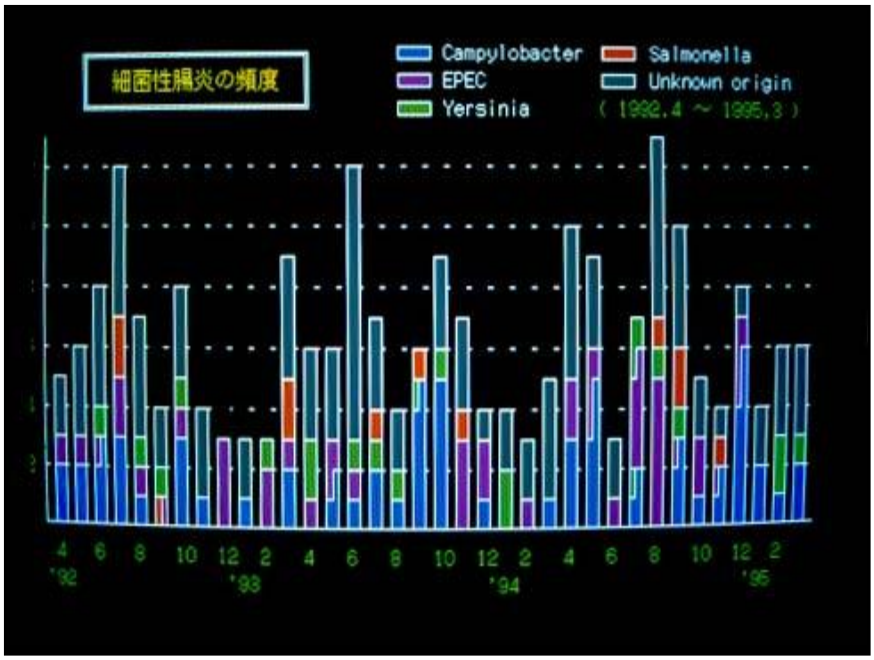
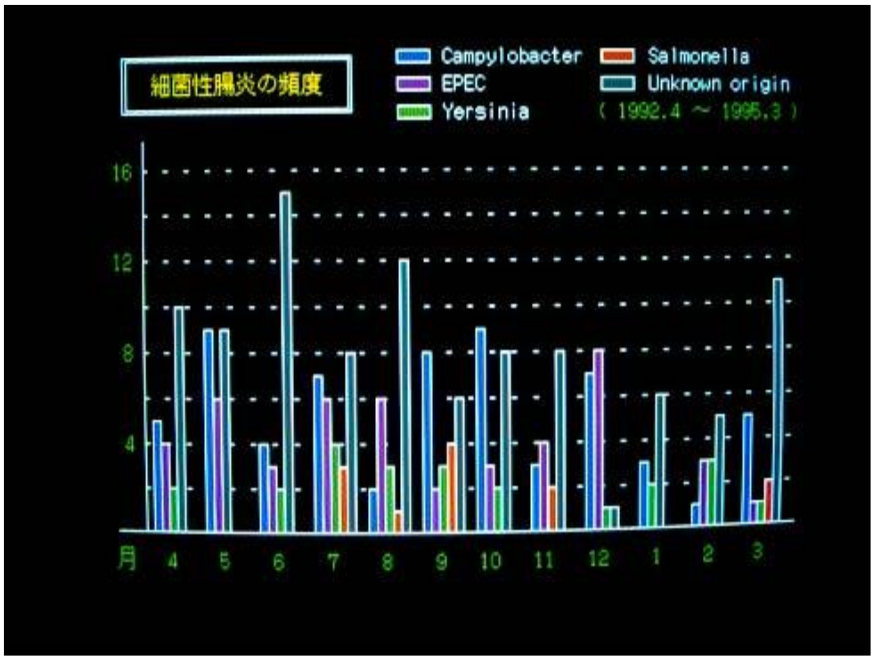
最近3年間の細菌性腸炎の統計
ーその臨床症状、診断、治療、経過ー
第49回北陸医学会総会
第252回日本小児科学会北陸地方会
時：平成7年9月3日
於：金沢大学医学部

糞便の性状より細菌性腸炎と思われる症例をまとめてみましたので報告致します。症例は平成４年４月より本年３月末までの３年間の241例であります。

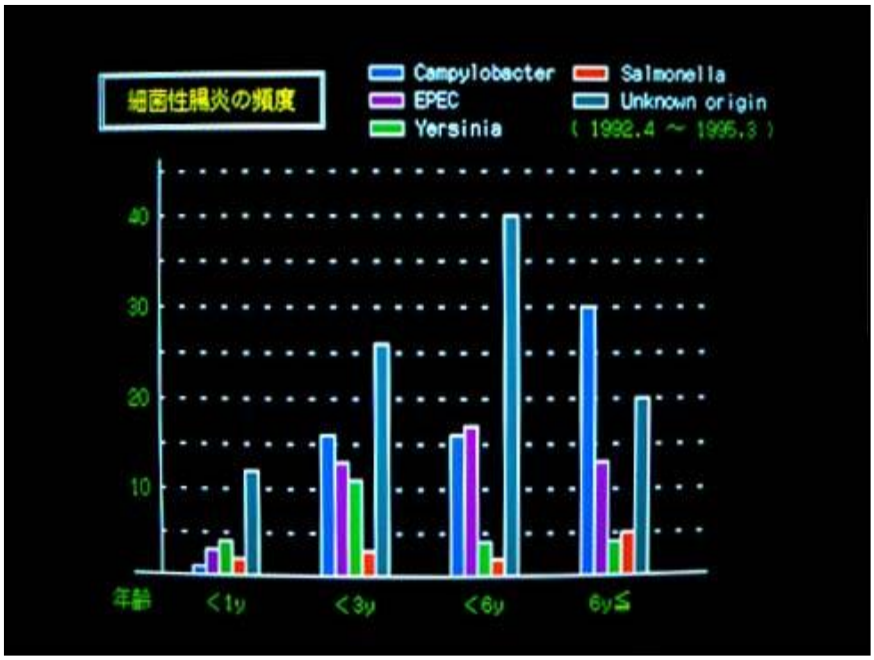
その241例中143例約60%に病原性のある細菌を検出できました。病原大腸菌の中にはHUSを起こすあのEHECのH-157が３例ありました。膿を含有する糞便を培養したにもかかわらずETECも６株含まれていました。Yersiniaはそんなに希なものではないようです。２種の細菌の混合感染もいくつかありました。また、すべて検査した訳ではありませんが、細菌とウィルスとの混合感染もありました。血清型で検出できない病原大腸菌、未知の病原菌、あるいは見落としの可能性もあり、それらをUnknown originとして1つにまとめました。ただアデノレックスだけで(+)のものや、Drug inducedが考えられるものは除外しました。



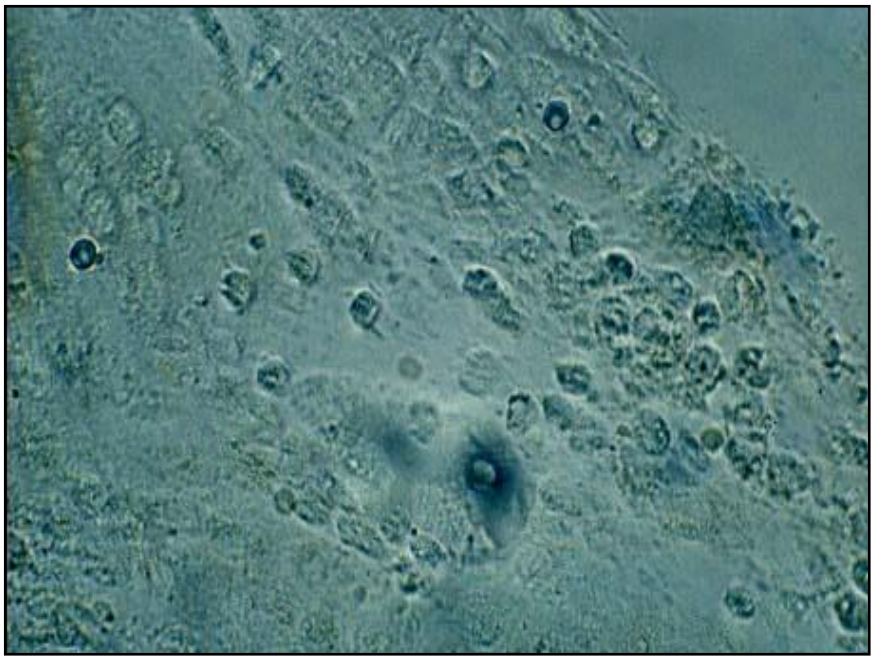
３年間の月別のものです。



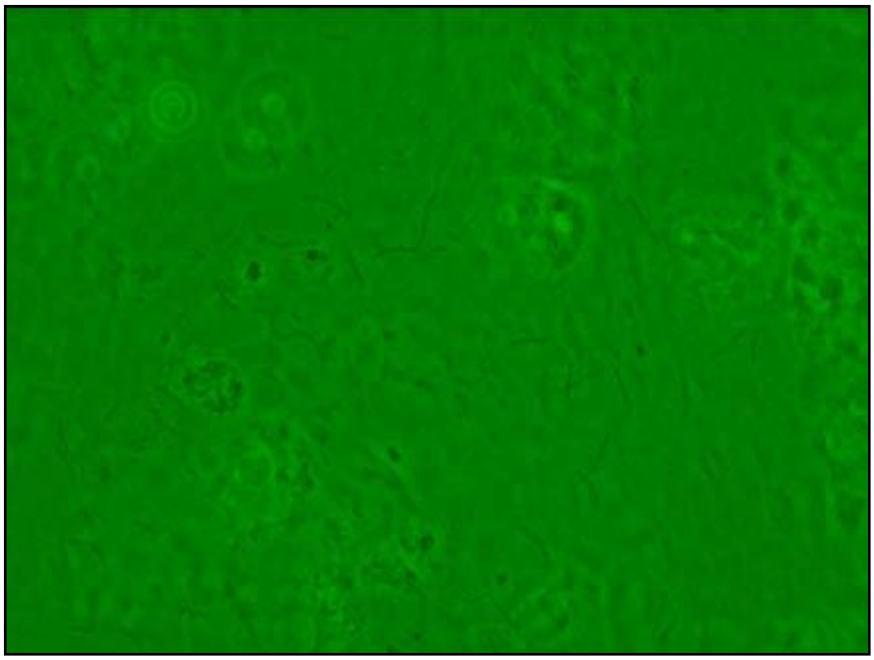
月別にまとめると、冬季はやはり細菌性のものは少ないようです。



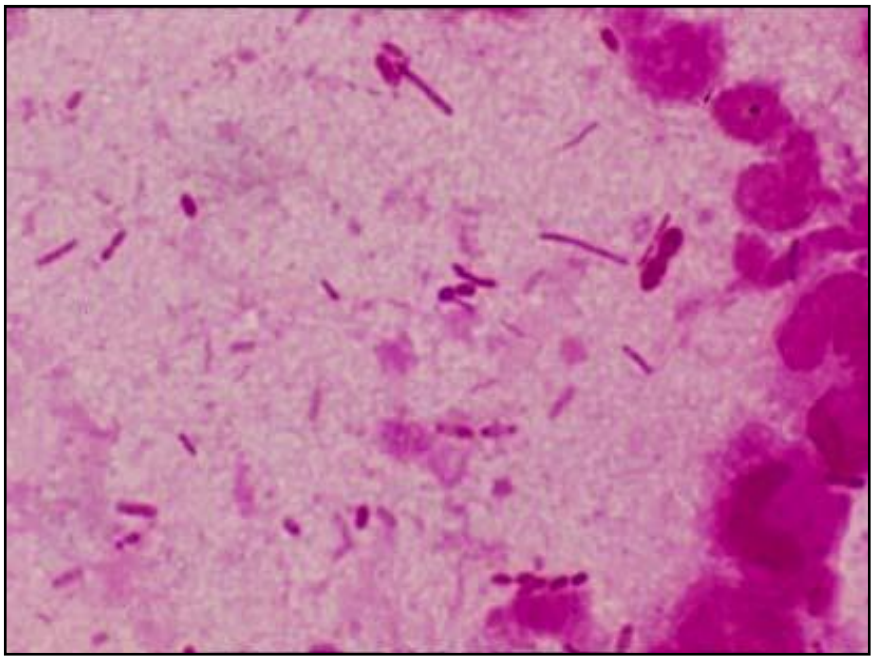
年齢別です。Campylobacterは年長児に多いようです。



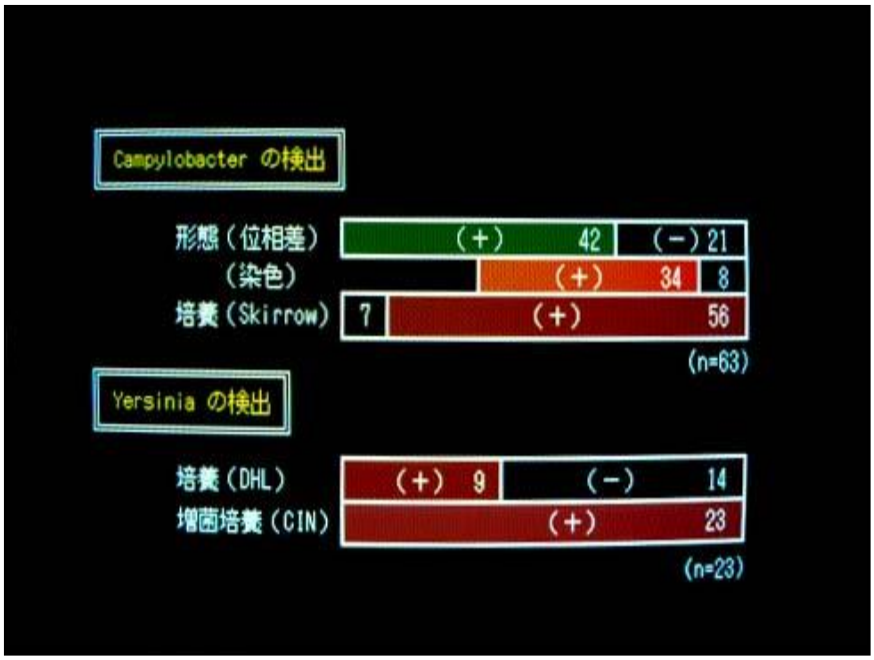
　まず糞便の粘液中の膿を確認した後、細菌検査及び培養をしました。



400倍で膿があればそのまま位相差で1000倍で鏡検しました。螺旋状の菌がススススーッと走っていればCampylobacterと診断しました。



次にフクシンで単染色し、螺旋状の菌体でCampylobacterと診断しました。

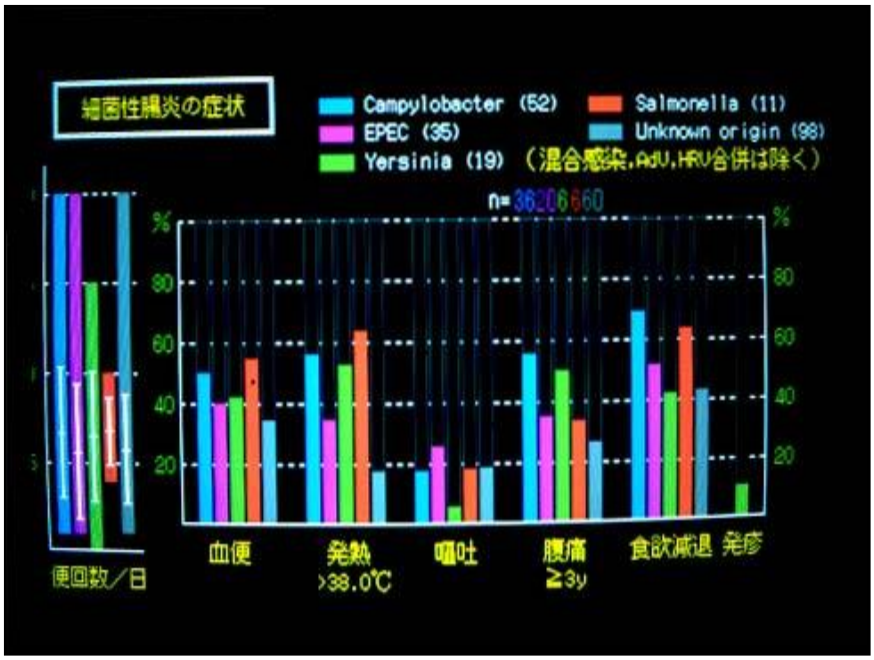


培地は通常のDHL、BTB、Skirrowを用い、Skirrowはgas generatorを用いて42℃、２日間培養しました。また、Yersiniaに関しては，PBSで4℃，3～4週間増菌培養をし、アルカリ処理後CIN培地で32℃、２日培養しました。

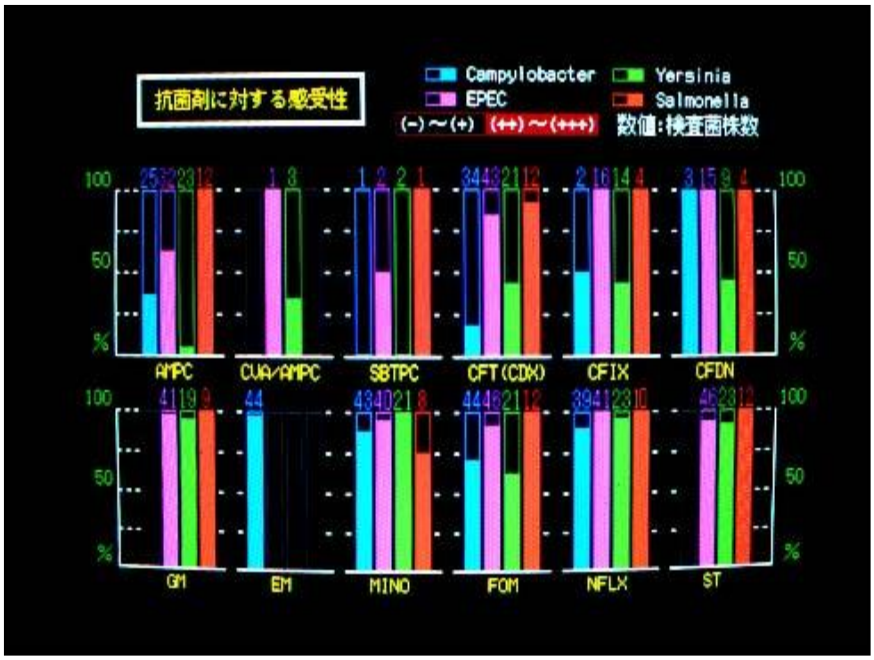
同定は定法にのっとり、病原大腸菌は市販の血清型のＯ抗原により同定しました。なおH抗原は検査しませんでした。

さて、Campylobacterに関し、位相差で陽性なら染色でもすべて陽性だったので、染色をしなかったのもあります。形態学的に陽性でも培養が陰性の場合もありますが、検体の条件の問題と思われます。

またYersiniaはDHLで37℃，18時間培養したものをさらに１日室温で培養して、もう一度観察しました。それでも増菌培養の1/3強しか検出できませんでした。即ち通常の培養では多数のYersiniaが見逃されていると思われます。なお総て血清型が０３のYersinia enterocoliticaでありました。



症状です。あまり差がないようです。Yersiniaで発疹を伴うものが２例にありました。なおEHECのH-157は総て血便でした。



感受性です。経口のものを中心に検査しました。CampylobacterはEMに対しほぼ感受性はありますが、FOM,NFLX,MINOに耐性の株もあります。病原大腸菌はST,NFLXにほぼ感受性はありますが、FOMに耐性の株もあります。YersiniaはST,FOMに耐性の株があります。SalmonellaはST,FOM,NFLXに総て感受性がありました。

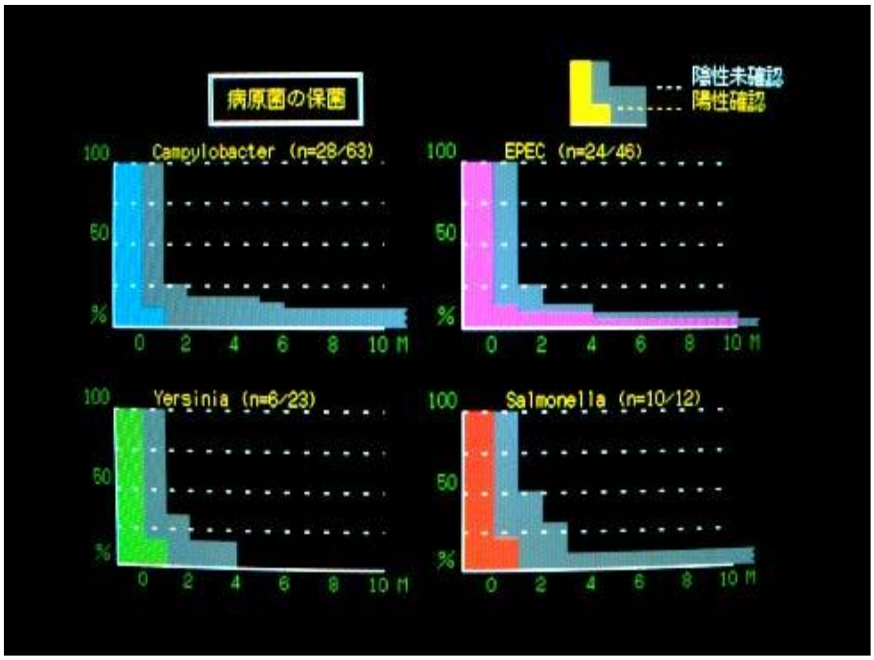
細菌性腸炎の抗菌剤の使用とその経過

（AdV.HRV の合併を除く）

病原菌	n	第一次投与薬剤 Mac	FOM	ST	NFLX	ST/Mac	(−)	適合薬剤	効果 ++	+	−	?
Campylobacter	52	44	3	5				35/40	47	4		1
EPEC	35		1	34				33/35	29	4	1	1
Yersinia	19		1	15		1	2	14/19	17	2		
Salmonella	11		2	8		1		11/11	3	1	7	
Campylo. + EPEC	8	7			1			0/8	5	3		
Campylo. + Yer.	2	1			1			1/2	2			
EPEC + Yer.	1						1	0/1		1		
EPEC + Sal.	1			1				0/1	1			
Unknown origin	98		9	85	2		2	−	76	19	2	1

++ : 2日目下痢(−)
+ : 7日目下痢(−)
− : 7日目下痢(+)
? : 再受診(−)

抗菌剤の治療に関しては賛否両論ありますがCampylobacterを疑った場合はMacrolyde系、それ以外はST合剤を使用しました。Penicillin、Cephem系は使用しませんでした。Busmuthを併用しました。ほとんどは２日目には下痢は改善し、その改善率は76%でした。その使用薬剤と感受性の合致率は81%でありました。大体治療開始24時間位で症状が消失しました。ただSalmonellaだけは感受性のある薬剤を使っても反応が悪い傾向にありましたが、発熱等の全身状態はすぐ改善しました。２日目で感受性を見て抗菌剤を計約１週間投与しました。Unknown originの場合には、Yersinia等検出できない病原菌を想定し同様に１週間投与しました。Salmonellaと判明した時はFOMを投与しました。



その後の再培養の結果です。Salmonellaだけではなく、総ての菌種で健康保菌者として残っている様であります。

スライドありがとうございました。

以上、ここ３年間の細菌性の腸炎と思われる症例について報告致しました。